

## マーク・スー博士を招き、東京で記者会見

吉田 文彦

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)と長崎大学核廃絶研究センター(RECNA)は、北朝鮮情勢に詳しいパグウォッシュ会議評議員の政治学者、マーク・スー博士(韓国出身、ベルリン在住)を東京に招いた。

スー博士は11月9日(金)、東京・内幸町にある日本記者クラブで同クラブ主催の記者会見にのぞみ、非核化に関する北朝鮮の動きや外交戦略、金正恩体制の権力基盤などについて所感を述べた。同日に、報道機関のシニアライター・エディターを対象としたラウンドテーブルも開催し、活発な議論が展開された。

スー博士はこれまでたびたび平壤を訪問し、政府や朝鮮労働党の幹部らと意見交換してきた北朝鮮通だ。パグウォッシュ会議でも長年にわたって、北朝鮮との関係をつなぐパイプ役を担ってきた。「また聞き」の情報ではなく、自分自身で見聞した一次情報に基づいた分析は説得力があり、記者会見に出席したジャーナリストたちもしきりにメモをとっていた。

スー博士が北朝鮮を訪れるようになったのは2001年からだ。同時多発テロ(9.11テロ)を受けて、米国政府が北朝鮮をテロ支援国家とみなし、「悪の枢軸」のひとつとして名指しするようになった。

こうした北朝鮮への「敵対政策」に潜むリスクを深く憂慮し、平壤との交流に直接関わっていくことにした。

スー博士は記者会見で、いくつも「秘話」を披露した。そのひとつが今年になって南北関係が一気に好転するにいたった経緯である。スー博士の説明によると、以下のような舞台裏の動きがあった。

大きな転機は、2017年5月に韓国で文在寅大統領が就任したことだ。幼少の頃に起きた朝鮮戦争の際、韓国の難民キャンプで厳しい暮らしをした経験を持つ文大統領は、政権発足当初から南北の関係改善に強い意欲を持っていた。そしてさっそく、7月に訪問先のベルリンで演説し、北朝鮮に向けに3つの重要なメッセージを送った。その骨子は①北朝鮮の体制変更は求めない、②朝鮮半島の早期の統一も目指さない、③北朝鮮が米国・日本等と新しい関係を樹立することを韓国が妨害することはない——である。



マーク・スー博士 2018年11月9日  
(場所: 日本記者クラブ 写真提供: PCU-NC)

核・ミサイル実験を繰り返していた北朝鮮ではあったが、文大統領の演説に敏感に反応し、10月にスー博士を平壤に招いた。

北朝鮮では「仮に米国が抵抗したとしても、文大統領はベルリンで示した約束を守るのか」と何度も尋ねられた。スー博士は「(2018年2月開催の)平昌(韓国)での冬季オリンピックが(南北接近の)チャンスで、韓国との対話の機会を持った方がいい」と助言した。もちろん、この言葉だけで北朝鮮が政策転換したわけではないだろうが、スー博士が重要な助言役をしてきたことを物語るエピソードだった。

ラウンドテーブルに出席したのは、RECNAが招待した約10名。チャタムハウス・ルール(発言者の名前の引用は不可)のもとで行われた。

東京の報道機関を対象にしたラウンドテーブルはRECNAとしては初めての試みだったが、出席者からは「また、ぜひ」との要望が相次いだ。PCU-NCのご厚意、同事務局のご尽力で、初の試みを成功させることができた。

(よしだ ふみひこ、RECNA副センター長)

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)が主催するナガサキ・ユース代表団は、今年で7回目となり、第7期生として、第6期生の経験者2名を含む下記の9名が選ばれた。第7期生は2019年4月～5月にニューヨークの国連本部で開かれる2020年NPT再検討会議第3回準備委員会に派遣される予定で、その前後、長崎から核廃絶へ向けての発信を行うために必要な活動も併せて行うことになっている。

●厚田 梨帆(あつた りほ)

長崎大学多文化社会学部2年

初めまして。長崎で勉強している一学生として、一日本人として、そして一人の人間として様々な視点から物事を見ていけるように頑張ります。今回の機会を活かして、精一杯自分の出来ることを仲間と共に取り組んでいきます。よろしくお祈りします。

●内橋 寛二(うちはし かんじ)

長崎大学多文化社会学部3年

核兵器廃絶という目標を平和な世界を目指す上でやるべきことの一部分であることを心に留めて、被爆地長崎で生きる人間として核廃絶への活動に取り組みながら、世界で起きている様々な問題に目を向けていきたいと思えます。

●何 雲艶(か うんえん)

長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科博士課程3年  
私は中国福建省からの留学生、何云(雲)艶(艶)と申します。長崎で勉強する間に、平和な世界はすべての基礎であることを学びました。核兵器と戦争がない平和な世界を築き上げることは私たち若い世代が担うべき責任だと思えます。これからも、世界平和と文化交流に貢献していきたいと思えます。

●高見 すなお(たかみ すなお)

長崎大学多文化社会学部1年

長崎大学多文化社会学部1年の高見すなおです。栃木県で経験した2011年の原発事故の際に感じた恐怖、長崎の被爆者の方の体験を通じて、「核」が人間にもたらす「痛み」を肌で感じた経験のある者として、核兵器の恐ろしさを世界に伝えたいです。

●永江 早紀(ながえ さき)

長崎大学多文化社会学部3年

こんにちは。私は、今回、2回目のチャレンジとなる永江早紀です！6期生の活動の中で、被爆の歴史をナガサキやヒロシマの歴史ではなく、人類の記憶として、世代や国境を越えた継承をしていくことが大事だと気づきました。7期生でもこの想いをもっと多くの方へ発信していきたいです！



ナガサキ・ユース代表団第7期生 2018年12月6日  
(上段左より矢野、永江、厚田、中山、内橋、下段左より牟田、高見、何、中島)  
(場所:RECNA 写真提供:PCU-NC)

●中島 大樹(なかしま たいき)

長崎大学多文化社会学部3年

現在の国際情勢から核なき世界の実現が困難にも見える中、核兵器禁止条約の進歩、前回のジュネーブでの第2回準備委員会への世界からの若者の参加など、実現へ向けていくつかの希望の兆しもあります。ともに、今出来ること、将来に向けてすべきことを考えていきましょう。

●中山 穂香(なかやま ほのか)

長崎大学歯学部1年

私は関東出身で、大学進学に当たり長崎に来て長崎の人々との核に対する意識の違いに驚きました。自らが無知であることを知り被爆の実相について学びたいという思いを強くしました。ユースの一員として学び、考え、発信することで核なき世界の実現に貢献します。

●牟田 麗(むた うらら)

長崎大学多文化社会学部1年

原爆の惨禍による多くの苦しみや悲しみを人々は乗り越え、今、私と同じ地、長崎に存在し、生まれ育ってきた意味を改めて考えつつ、このユース活動を通して多角的に物事を学び、考え、行動することで今後の社会を担う世代である私たちがどのようにしていかなければならないのかを7期生の仲間と多くの人々と共に考え、”action”に変えていけるような人に成長したいと思っています。  
(次ページにつづく)

●矢野 大輝(やの だいき)

長崎大学工学部1年

核兵器のない世界を実現するためには、私達一人一人が自分には何ができるのか、どうすれば核兵器のない平和な世界

を実現できるのかを考えなければいけません。私はこういった思いを持ちながら、精一杯ユースの活動を全うしたいと思っています。

## 特別市民セミナー

### 「原爆投下は必要なかった」歴史家・長谷川毅氏

山口 響

原爆投下国アメリカの地で、その使用に至る政治的プロセスを鋭く抉る思索を続ける日本人歴史家がいる。その名は、長谷川毅(はせがわ・つよし)氏。北海道大学スラブ研究センターから米国のカリフォルニア大学サンタバーバラ校歴史学部に移られた後、本来の専門であるロシアに関する知見を活かして、原爆投下と日本の降伏をめぐる米国・ソ連・日本三国の相克に焦点を当てる研究を世に放った稀有の歴史家である。この研究は、米国においては *Racing the enemy: Stalin, Truman and the Surrender of Japan* (2005)、日本においては『暗闘』(中央公論新社、2006年。のち、中公文庫)という形で、それぞれまとめられている。

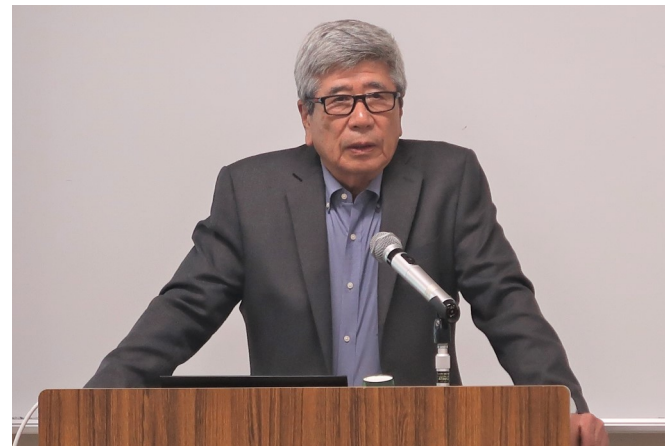
研究者として原爆問題を扱ってこられた長谷川氏にとって、意外にも今回が初めての長崎入り。本来はプライベートなご旅行の予定だったものを、私たちの強引な要請に応じて、長崎の市民の前でご講演を賜ることになった。実質2日間の滞在中で、長崎市長や長崎大学長の表敬訪問、原爆資料館見学、原爆関連遺構巡りなどを精力的にこなされ、10月10日、長崎大学文教キャンパスを会場とした特別市民セミナー「原爆、ソ連参戦と日本降伏の決定」に臨まれた。

『暗闘』をベースにした講演で長谷川氏は、原爆投下を正当化する2つの仮定に挑戦された。

第一の仮定は、日本を降伏させるために、トルーマン大統領には「日本本土の攻撃」か「原爆投下」かの2つの選択肢しかなかった、というもの。一般的には、前者がもたらすきわめて大きな人的犠牲を回避するために、後者がやむを得ず選択された、と説明されることが多い。

これに対して長谷川氏は、「ソ連の対日参戦」と「日本に対する君主制存続の保証」というオプションは十分に追求されなかった、と批判した。米国のトルーマン大統領は、米英中によるポツダム宣言へのソ連の署名を拒絶し、あわせて日本の君主制に関する言及を宣言文から巧妙に排除した。これによって日本政府は、ソ連による和平の斡旋という誤った方針に希望をつなぎ続けることになり、結果としてポツダム宣言を「黙殺」した。そしてこの「黙殺」は、原爆投下へのアリバイを与えることになったのである。

第二の仮定は、原爆投下が日本の降伏に決定的な役割を果たした、というものである。



長谷川毅名誉教授 2018年10月10日  
(場所:長崎大学教養教育棟 撮影:PCU-NC)

長谷川氏はこの仮定も厳しく批判する。8月6日の広島への原爆投下後、最高戦争指導会議は開かれなかったが、8月9日未明にソ連が日本に宣戦布告し満州に雪崩を打って攻め込んだ際には、直ちに同会議が開かれ、その後、昭和天皇による降伏の「聖断」につながる。他方で、長崎原爆は政府の降伏決定に何の影響も与えていなかった。

これら2つの仮定の否定を通じて、長谷川氏は、日本への原爆投下は不要だったと結論づけるのである。

あわせて長谷川氏は、米国は1945年までの時点で、民間人に残虐な取り扱いをしてはならないという倫理的敷居をすでに超えてしまっていた、と論じる。アメリカの名誉のために、原爆投下は戦争犯罪であると認めるべきだ、とまで同氏は言い切った。

返す刀で長谷川氏は、日本の戦争責任の問題にも触れる。日本政府が早く降伏の決定を下していたら、原爆投下もソ連参戦もなかった。それを回避できなかった日本の為政者には責任がある、と指摘するのである。

73年前の原爆投下を正当化しうるかどうかという問題は、今後の核兵器使用を予防する上で、避けて通れない問いだ。いったん容認されたことは、今後、二度、三度と認められる可能性が高いからである。長谷川氏は、長崎の市民に大きな宿題を残して帰られた。

(やまぐち ひびき、RECNA客員研究員)



# RECNAの活動

2018年10月1日～2018年12月31日

- |                         |  |                         |   |
|-------------------------|--|-------------------------|---|
| 10月2日(火)                | ■第3回長崎被爆・戦後史研究会「継承の力学ー広島における「被爆体験」の遺産化とその影響」<br>講師:根本雅也氏<br>場所:長崎大学RECNA会議室  | 11月9日(金)                | ■記者会見(日本記者クラブ主催)<br>出席者:マーク・スー博士<br>会場:日本記者クラブ  |
| 10月3日(水)                | ■国連軍縮フェローシップ講演(長崎原爆資料館)(広瀬副センター長)  | 11月9日(金)                | ■RECNAラウンドテーブル「最新の北朝鮮並びに韓国情勢について」<br>講師:マーク・スー博士<br>会場:日本記者クラブ  |
| 10月10日(水)               | ■特別市民セミナー「原爆、ソ連参戦と日本降伏の決定」<br>講師:長谷川毅氏(カリフォルニア大学サンタバーバラ校名誉教授)<br>場所:長崎大学教養教育棟  | 11月15日(木)               | ■日本非核宣言自治体協議会U-40世代の交流によるネットワーク拡大事業講演(国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館)(鈴木センター長)  |
| 10月13日(土)               | ■市民対話集会2018講演(佐賀市保健福祉会館)(鈴木センター長)  | 11月16日(金)～<br>11月18日(日) | ■第6回核兵器廃絶地球市民長崎集会(原爆資料館)(鈴木センター長、吉田副センター長、広瀬副センター長、中村准教授、黒沢顧問、朝長客員教授、梅林客員教授、太田客員教授)   |
| 10月13日(土)               | ■「ヒバクシャ国際署名」をすすめる長崎県民の会2周年のつどい(長崎原爆被災者協議会講堂)(広瀬副センター長)   | 11月24日(土)               | ■第2回地球未来シンポジウム「核と鎮魂Ⅱ」講演(京都芸術劇場 春秋座)(鈴木センター長)  |
| 10月14日(日)               | ■第62回香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会特別講演(長崎大学)(鈴木センター長)  | 11月24日(土)               | ■JENESYS2018大洋州島しょ国との青少年交流(長崎大学総合教育研究棟)(中村准教授)  |
| 10月14日(日)               | ■「語り継ぐ被爆体験(家族・交流証言)推進事業」講演(長崎原爆資料館)(広瀬副センター長)  | 11月27日(火)               | ■国立ソウル大学校統一平和研究院訪問(吉田副センター長、広瀬副センター長、全教授)   |
| 10月17日(水)～<br>10月20日(土) | ■Cyber Security Workshop参加(ロンドン)(鈴木センター長)  | 11月28日(水)               | ■国立統一研究院、延世大学、北韓情報センター訪問(鈴木センター長、吉田副センター長、広瀬副センター長、全教授)   |
| 10月30日(火)～<br>11月3日(土)  | ■Exploring New Approaches to Arms control in the 21st century: Focusing on maintaining and expanding the integrity of the INF Treaty and Presidential Nuclear Initiatives (PNIs)ワークショップ参加(オスロ)(吉田副センター長) | 11月29日(木)               | ■韓国国立外交院日本研究センターセミナー講演(鈴木センター長)   |
| 11月3日(土)                | ■平成30年度核兵器廃絶市民講座第4回「岐路に立つ日本の非核」<br>講師:太田昌克氏(RECNA客員教授)   | 11月29日(木)               | ■韓国世宗研究所訪問(鈴木センター長、吉田副センター長、全教授)  |
| 11月4日(日)                | ■平和のみみ(美海)ちゃんの集い2018講演(神戸まちづくり会館)(鈴木センター長)   | 12月1日(土)                | ■平成30年度核兵器廃絶市民講座第5回「反戦主義者なる事通告申上げます」<br>講師:森永玲氏(RECNA客員教授)  |
| 11月4日(日)                | ■反核医師のつどい講演(長崎原爆資料館)(中村准教授)  | 12月6日(木)                | ■ナガサキ・ユース代表団第7期生任命式(調学長特別補佐、広瀬副センター長、ナガサキ・ユース代表団)   |
|                         |  | 12月10日(月)～<br>12月13日(木) | ■RSIS Roundtable on Nuclear Energy Development in Southeast Asia: Emerging Challenges and Opportunitiesパネリスト(シンガポール)(鈴木センター長) |

## お知らせ

### 平成30年度核兵器廃絶市民講座「核兵器のない世界をめざして」

第6回「核廃絶寸前 レイキャピク首脳会談の教訓」  
講師:吉田文彦(RECNA副センター長)  
日時:2019年1月26日(土)13:30～15:30  
場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ  
※受講料は無料、参加申し込み不要  
※15:30～16:30「RECNAと語ろう」  
主催:核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

## RECNA ニュースレター

長崎大学核兵器廃絶研究センター

第7巻3号 2018年12月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター  
〒852-8521 長崎市文教町1-14  
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165  
E-mail: recna\_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp  
http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 インテックス

©2018 長崎大学核兵器廃絶研究センター